

一所懸命と一生懸命

文学部長 向山 宏



NHKの大河ドラマ「毛利元就」が佳境に入ってきている。その番組の時代考証を担当されている文学部の岸田裕之教授によれば、「一所懸命」とは文字どおり、新時代に対処して国人衆たちの階層を抱いていた心性であったようである。戦国時代という難しい時代に自分の所領を保全しようと、日々心を砕いた国人衆たちの願いを護り束ねる形で、毛利元就が台頭してくる。そういう状況の中で、元就がどういう人間であり、どういう人間でなければ務まらなかったのか。時代と状況が、成功する指導者の内実を規定するとすれば、それはどうい人物として描かれるべきなのか。そういう隠れた史実を意識して、ドラマを

観ていただきたいものである。今、文学部でも時代の転換点にさしかかっており、ある意味では教職員が「一所懸命」に頑張っておられる。新入生諸君にとっても、今年から「待たされることなく」専門教育に飛び込むことになった。専門教育と教養的教育が、いずれも四年間平行して一貫教

育されることになったためである。自分の選択した「一所」を「懸命」に自家薬籠中のものにしていただきたい(専門教育)。欲をいえば、「一所」を基盤にして周辺の新しい学問領域を切り取って、その上で同時に天下国家や社会のことも「一生懸命」に考えていただきたい(教養的教育)。

育されることになったためである。自分の選択した「一所」を「懸命」に自家薬籠中のものにしていただきたい(専門教育)。欲をいえば、「一所」を基盤にして周辺の新しい学問領域を切り取って、その上で同時に天下国家や社会のことも「一生懸命」に考えていただきたい(教養的教育)。

(むかいやま・ひろし)



生活の匙加減

文学研究科博士課程後期

熊谷 卓哉



皆さんご入学おめでとう。突然だが、後の海舟、勝麟太郎は、はじめ蘭学を学ぼうとした時入門を断られた。その理由は「江戸人は性浮薄で、地味で根気のいる蘭学の習得には向かない」か

らだそうである。出生地で足切りにあたりはしない現代に生まれて、お互いに大いに幸運だ。しかしこの台詞を吐いた蘭学先生にも、一理あるように思える。蘭学に限らず、学問の習得に、地味で根気のいる作業が不可欠なのは事実ではないか。

「ご入学おめでとう」。

(くまがい・たくや)

しかし君たちに関して言えば、蘭学先生の足切りにあう心配はまずないだろう。受験勉強というきわめて野暮ったい作業を、決して短くない期間やり続けることができたという事実が、君たちの性情が浮薄でないことを十分に証明してくれている。しかし、この先ということになると保証の限りではない。

大学生活には多くの楽しみがある。多くの楽しみを経験すること、人間の性情を浮薄にするとは必ずしも言えないが、多くの楽しみに囲まれてなお、地味な作業を厭われない性情を維持するのが困難であるという経験則は、厳然と存在する。江戸人が浮薄であったのはなぜか。やはりそれは、爛熟した江戸の文化が彼らに多様な楽